

球拾と球売

村崎陽気

たかしの学校の校庭の奥には森がありました。野球部の先輩の話では、あの森に入った球はほとんど見つかったことがない、とのことでした。

ある日の練習で三年生の星野さんの打った球が森に入りました。補欠のたかしは球拾いだっただけで森まで探しに行きました。

十分ほど探しましたが、球は見つかりません。そのうち校庭のほうから、もう戻ってこいと声がしたのでたかしはあきらめて帰りました。

次の日も星野さんの打った球が森に入りました。たかしは、星野さんは最近調子がいいなと思いつつ、今度は球を見つけようと球が入った場所を正確に覚えて森に入りました。すると、今度は三分もしないうちに球が森の奥のほうに落ちていたのを発見することができました。しかし、たかしがそれを拾いに行こうとしたとき、何かの生き物がいることに気が付きました。その生き物は背負っていた袋に球をしまうとすぐに行ってしまうました。たかしは興味津々でそれを追いかけてきました。

「すいません。球を返してください」

たかしは追いかけて言いましたが、その生き物は止まろうとしません。しばらく夢中で走っていたら、かなり森の奥のほうまで来てしまいました。たかしは足だけは速かったのですが、その生き物にはかなわなく、もう見失いそうになりました。そのとき、一つの小屋があるのを見えました。その生き物はその小屋に入っていました。

コンコン

「すみません。球を返してください」
たかしは小屋のドアをノックして言いましたが、中から返事はありません。

「こらっ、泥棒出てこい！」

たかしは言い方を変えてみました。

ギイ

次の瞬間、ドアがゆっくりと開きました。

「泥棒とは失礼な」

部屋にいたのは大きな猫でした。

小屋の中を見たたかしは、とても驚きました。小屋の中には今日の球以外にも何十もの球が並べられていたのです。

「球を返してくださいませんか。これだけあるなら一個くらい返してください」

「ハハハ、この球は私が森の中で拾ったのです。だからこれは私のものです」

「野球の球なんか集めてどうするんです」

「野球の球は良い値で売れるんです。みんな転がして遊ぶには最高だといいます」

猫は悪い顔をして言いました。

「私はここ何十年、球を拾っては、それを他の猫たちに売って生計を立ててきました。しかし、最近とても生活が厳しい。ここ二、三年は収入が本当に少ないのです。なんでかって、打撃練習で森まで飛ばせるのはあのホシノとかいう人だけではないですか。ただでさえ厳しいというのに、あなたのような球拾いを派遣されたら私はこの先どうやって生きていけばいいのでしょうか」

その猫の悲しげな顔を見て、たかしは気の毒になりました。

結局その日も、たかしは球を持たずに校庭に戻りました。

た。

それからは練習のとき球が森に入ったら、たかしはすぐに自分が取りに行くといい、走って森に入りました。他の球拾いの子が探しにいつて森の猫を知ったら、森の猫のことを懲らしめてしまおうと思ったからです。たかしはいつも適当に探すふりだけをして、十分くらい経つたら手ぶらで見つからなかったと言い森から出できました。

ある日星野さんが練習中に骨を折ってしまいました。

そして、そのまま野球部を辞めてしまいました。それから、球が森まで飛ぶことはほとんどなくなりました。

一か月くらい経つたある日、練習が早く終わったので、たかしは森の小屋まで行きました。ドアをノックすると、中から「どうぞ開いています」とありました。

開けると、元気なさそうに猫は椅子に座っていました。

「大丈夫ですか」

「野球部の子が話しているのを街で聞きました。ホシノさんが部を辞めたそうですね。どおりで球が飛んでこないわけだ」

この前初めて来たとき、何十個も並べられていた球も部屋の際に置かれている五個しかなくなってしまったようです。猫はだいぶやつれた様子でした。

「心配だったから、部屋から何個か球を持ってきました。もうかなり古くてポロボロのやつですけど」

たかしは袋からそれらを取り出して言いました。

「ああ、ありがとう。でもそんな古い球ではほとんどお金にならないのです。それに球を持ち出したのがわかれば、あなたが怒られてしまう」

たかしが残念そうに球をしまうのを見て猫は言いました。

「あなたが打って、ここまで飛ばしてくれ私を願っているのです」

「ハハ、それは無理です。僕は球拾い専門なもんで」

「一年生のあなたが打ってくれるようになれば、私の生活も向こう二年は安泰だ」

「僕はここまで飛ばせる力なんてありませんから」

「私はもう十何年もここで球を集めてきました。球を解体して、研究したこともあります。球を飛ばすには回転が本場に重要なんです。球を叩いて回転をかけて打つんです。」

「はあ、回転ですか。しかし、今球拾いの僕が練習に参加できるようになるのは、いつになるかわかりません」

たかしは申し訳なさそうに言いました。

「そうですね、それなら私もそろそろ違う商売を考えなくてははいけませんねえ」

そういうと猫は見たことのないあやしいもようをしたキノコを部屋の棚から取り出しました。

「そのキノコは何ですか」

「この森のある場所だとれるキノコです。球売りができなくなるとすると、今度は薬でも作って売りますよ」
猫はそういうとキノコをなべで煮始めました。そして、作業の邪魔になるからと、たかしを小屋から帰らせました。

「今日は三年生が昼食後、腹痛を訴え練習を休んでいる。それで人が少ないから補欠組も打撃練習に参加しろ」

たかしは本当に久しぶりに球を打つことになりました。もともと打つことは苦手でした。森の猫が言った方法で打とうとすると、球に当たりさえもませんでした。

何度も空振りをしていくうちに、もうなんだか森の猫が生活に困るうが、自分には関係ないと思いはじめました。

キイン

何球も空振りした後やっと球に当たりました。

しかし打った衝撃なんてものは、ほとんどありませんでした。

ああ、やっぱりこんなじゃ飛ばはずがない。

そう思って打球をほんやりと見ていました。

そのときたかしは気が付きました。

球が落ちてこないのです。

高くふわふわと空を泳いでいます。

それはずっとどこまでも風船のように飛んでいくように思えました。

その日の練習が終わると、たかしはうれしい気持ちで森に行きました。もう森の猫は僕の打った球を回収して、小屋で出荷の準備をしているころかなあ。たかしはその球を打ったのは自分だと早く猫に伝えたいと思いました。ところが、小屋のなかはいつも猫が座っていた椅子があるだけで、野球の球もあやしいもようのキノコもなくなっていました。そして森の中をどれだけ探しても猫の姿を見つけないできませんでした。